九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王粲の詩賦とその志について

甲斐, 勝二
福岡大学 : 講師

https://doi.org/10.15017/9728

出版情報：中国文学論集. 15, pp.49-70, 1986-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

王粲の詩賦とその志について

甲斐勝二

はじめに

王粲（一七七―二一七）は、後漢末の建安年間（一九六―二二〇）後期、やがて後漢王朝（二二五―二二〇）を廃し新たに魏王朝（二二〇―二六五）を建てるに至る曹操とその子曹丕・曹植の下で主に活動した、當時を代表する詩文家として知られている。

王粲の生涯はほぼ次の三期に分けられる。即ち、まず、父・王謙の下に生まれ、時の皇帝獻帝の遷都に従って長安に移り、しばらくして荆州へと下るまでの少年期（―十六歳）[1]。次に、荆州において不遇感を積み重ねつつ日を送る青年期（―三十二歳）。そして、曹操に降り官職と爵位を得、病没するまでの壮年期（―四十一歳）の三期である。但し、現存する王粲の詩賦について見るならば、曹操に降る以前と以後の二期に分けて考えることになる。なぜな

らば、王粲の現存する作品の中には少年期のものと思われる作品がない上に、この時期を境として王粲の作る詩賦に大きな變化が認められるからである。この變化とその原因について、凌迅氏は以下のように述べる。(2)

在鄴下文人集團中、居于實際領導地位的先是曹操、次是曹丕曹植。由三曹組成的鄴下文人集團之間多有贈答之作、但王粲更多的却爲奉教之作、如「浮淮賦」「寡婦賦」「槐樹賦」「柳賦」等。由于緣于奉教、這些作品多缺乏積極的社會意義、甚而還表現出某些黨附的庸俗氣。在鄴下的生活中、王粲脫出了淹滯之痛、沈淪之苦、過着較爲優裕的生活。公宴・田獵・并形諸文字、如「公宴詩」「羽獵賦」等。這些作品只不過是騁才使能、鋪陳麗句、實在沒有什麼可取。這說明王粲作爲一個封建階級的文人、一旦獲得舊日的條件、卽刻就會陷入形式主義的泥淖。

つまり、凌迅氏によると、曹操に降って後の王粲は、それまでの苦勞から解放されて餘裕ある生活を得ることができたため、地主階級本來の姿を顯し、それ以前の社會性を持った作品とは違う、單に字句を弄するばかりの形式主義的作品を作り始めたというのである。

しかしながら、筆者も確かにその作品の變化は凌迅氏同樣認める所であるけれども、その原因については、王粲の志のありかにまで立入って、もう少し詳しく檢討する必要があると思われる。この小論では、王粲の生涯を辿りつつ、その折折に作られた詩賦等の作品に考察を加え、王粲の志のありかを明らかにし、以って彼が詩賦の制作に見せた變化のより本質的な原因を探ってみたい。

一

王粲は、王謙の子として生まれた。曾祖父の王龔、及び祖父の王暢は、共に王朝に仕える臣下としては通常最高の位である三公にまで昇っている。『後漢書』王龔傳には、職務に清廉で、國政を預る士大夫としての意識が強く、宮廷を專横しようとする宦官勢力との對決を試みる王龔の姿が記されている。この王龔の性格は、その子王暢にも受け繼がれていたようである。同書王暢傳によれば、皇帝の縁者が多く、職務を遂行し難い南陽の地に太守として赴任した折には、その地で縁者ら豪族を立法と實力行使で震え上らせているし、また、清流士大夫勢力と宦官濁流勢力との對立が激化するころには、士大夫勢力の代表的人物として「八俊」の第四に擧げられている。[3] 王粲の父王謙は、結局外戚勢力を代表する大將軍何進の幕僚長にまでしかなれなかったとはいえ、何進が王謙の家柄に目をつけ、婚姻關係を結ぼうとした時、それを許さなかったのは、清流士大夫の流れに立つ王謙の意地と見るべきである。[4]

このような家柄に育った王粲であれば、當然ながら清流士大夫の一員として、彼らが信奉し且つ實踐しようとした儒學思想に基づく經世濟民の志を強く持ったに違いない。まだ十四・五歲にすぎない王粲が、長安にて當時第一流の學者であった蔡邕にその才能を認められ、

> 此れ、王公（王暢）の孫也。異才有り、吾如かざる也。吾家の書籍文章は、盡く當に之に與えん。（魏書王粲傳）

と稱嘆された時、蔡邕の側に何らかの思惑があったにせよ、[5] 王粲の側からすれば、引き合いに出された祖父の王暢を辱めぬ治國のための業績を擧げねばならないという使命感を更に強く持つ事になったと思われる。

王粲は、その後十六歳にして就職の辟(まね)きを受けるけれども、權力爭いをめぐる血腥い長安の動亂の故を以って就かず、荆州へと向うことになる。當時の荆州は劉表がその長官を勤め、後漢末の混亂に各地が荒廢していた中で、比較的隱やかな土地であったらしい。荆州に避難する人物はずいぶんと多かったようである。その上、劉表は、王粲と原籍を同じくし、王暢に敎えを受けた、王粲にとっては馴染み深い人物である。王暢が「八俊」に擧げられた當時、彼もまた「八及」の一人に擧げられていた。[6] 天下の名士としてその頃から已に人望があったのである。

この荆州への旅立ちの折の情景と心情を詠うのが「七哀詩」其一である。[7]

西京亂無象　西京、亂れて象(みち)無く
豺虎方遘患　豺虎、方に患を遘ふ
復棄中國去　復た中國を棄てて去り
遠身適荆蠻　身を遠ざけて荆蠻に適く
親戚對我悲　親戚、我に對(むか)ひて悲しみ
朋友相追攀　朋友、相追ひて攀(すが)る
出門無所見　門を出づるに見る所無く
白骨蔽平原　白骨、平原を蔽ふのみ

路有飢婦人　路に飢ゑたる婦人有り
抱子棄草間　子を抱きて草間に棄つ
顧聞號泣聲　顧みて號泣の聲を聞くも
揮涕獨不還　涕を揮ひて獨り還らず
未知身死處　未だ身の死する所を知らず
何能兩相完　何ぞ能く兩(ふた)りながら相完からんと
驅馬棄之去　馬を驅りて之を棄てて去る
不忍聽此言　此の言を聽くに忍びず
南登霸陵岸　南のかた霸陵の岸に登り
廻首望長安　首を廻らして長安を望む
悟彼下泉人　彼の下泉の人に悟るや
喟然傷心肝　喟然として心肝を傷ましむ(8)

長安を離れて荆州へと向う途上、野原には人影は見えず、白骨が散らばるばかり。路上では泣き叫ぶ愛子を草間に捨て去る飢えた婦人と出合う。王粲が、このような情景に直面し、なす術も知らず我が馬を驅けしめ、その場から逃げるように去らねばならないのは、單に無惨な場面に立ち合って無力な人間一般の心情によるばかりではない。士大夫意識の強い王粲であれば、その逃亡は、經世濟民に力を盡すべき立場にありながら、無秩序極まる狀態

を前にしても自らは何の手助けもできないという責任感にさいなまれてのことに違いない。だとすれば、最後の二句に、つまり、暴政に苦しむが故に明王や賢伯などの有能な爲政者を思慕し平和な世を願ったという『詩經』「下泉」の詩人の心情をまざまざと思い知らされ、[9] 詩人同様深い嘆息をついて胸を痛ましめる王粲の姿に、王粲もまた「下泉」の詩人同様に、この無秩序な世界を秩序ある世界に再び治めなおしてくれる立派な指導者を希求しているのだ、という心情を讀み取ってよい。ところで、この詩が、長安に見切りをつけて荆州の牧劉表の下に向う途上の心情を詠うものであることに着目するならば、王粲が求めた明王賢伯とは、これから頼る劉表を具體的な人物として想定することができる。とすれば、最後の二句に、王粲の劉表に對する大きな期待、明王賢伯に違いない劉表の下で、自分の士大夫としての責任を果せるかも知れないという期待感をも窺うことができる。

二

ところが、意に反して、劉表は王粲を重用しなかったのである。荆州に着いた當時は、王粲はまだ十六七の少年であるから、重用されずとも仕方がないが、通例の起家の年弱冠を越えても責任ある役職を與えられないとすれば、王粲に焦りが起るのも不思議ではない。建安三年、王粲二十二歳の時に「三輔論」を著し、江濱の逸老の言に假りて長沙地方での反亂を鎭めた劉表の實力を稱贊し、また、建安五年、王粲二十四歳の時には「荆州文學記官志」を作り、荆州に秩序をもたらし學藝振興のため學校を設立した劉表を絶賞するのは、王粲が劉表の氣を惹こうとしての事だと思われる。[10]

しかし、王粲の贊辭にも係わらず、劉表は王粲にその實力を發揮させる場を與えた氣配はない。王粲の作品中には、劉表のために、袁譚・袁尙兄弟に向けて作られた二通の書狀が殘り、『魏書』王粲傳には、劉表の死後その嗣子の劉琮に曹操への投降を勸めた記述が殘るのだから、王粲が劉表・劉琮父子の近くにいたことは確實である。だが、王粲傳は、劉表が「甚しくは重んぜず」と記すばかりで、王粲が責任ある地位についてその腕を振った記錄は殘らないのである。王粲がこのように劉表に重用されなかった理由は、王粲の容貌がその才にそぐわぬ醜くさであったこと、及び弱弱しい體格、深みのない性格の故であった。[11] 劉表は王粲を人の指導者たるにはふさわしくないと見たのである。若年のころ、大儒蔡邕より絶大なる贊辭を得て、その家柄・才能・學識に相當大きな自信を持っていたはずの王粲が、このような劉表の扱いに失望落膽するのは當然である。親戚縁者らの悲しみを後にし、追いすがる友人を振り拂い、明王賢伯を求めてはるばるやって來た王粲の期待は虛しく空振りに終ったと言わねばならない。この王粲の落膽した心情を如實に示すのが、荆州期も後期になって作られる「登樓賦」である。[12] 今、押韵によって三段に分け、各段ごとに內容を檢討してみたい。

第一段は、久しく志を得ない王粲が、再び巡り來た秋に、しばらくは登樓の樂しみに憂いを紛わそうと高樓に登る所から詠い出される。

登茲樓以四望兮　茲の樓に登りて以って四に望む
聊假日以銷憂[13]　聊に日を假りて以って憂を銷す
覽斯宇之所處兮　斯の宇の處る所を覽るに

實顯敞而寡仇　實に顯敞として仇寡し
挾清漳之通浦兮　清漳の通浦を挾み
倚曲沮之長洲　曲沮の長洲に倚れり
背墳衍之廣陸兮　墳衍の廣陸を背にし
臨臯隰之沃流　臯隰の沃流に臨む
北彌陶牧　西接昭丘　北のかた陶牧に彌まり　西のかた昭丘に接す
華實蔽野　黍稷盈疇　華實、野を蔽ひ　黍稷、疇に盈てり
雖信美而非吾土　信に美なりと雖ども吾土に非らず
曾何足以少留　曾ち何ぞ以って少しくも留るに足らん

近邊に並び立つもののないこの高樓において、四方に廣がる雄大な地勢を見下し、豪氣な解放感に浸る王粲であったが、野に滿ちて今を盛りと咲く花、耕地に溢れる穀物の成熟した色に美しさを感じながら、この土地が自分を留める眞の場所ではないと思い知るのであった。調子よく進んできた楚辭調の七、六のリズムが後半で四字句を交えて崩れるのは、王粲の心情の變化に沿うものであろう。かくて第二段では、王粲がかつて離れ來たった中原の地へと歸鄉の思いを馳せる。(14)

遭紛濁而遷逝兮　紛濁に遭ひて遷り逝き
漫踰紀以迄今　漫として紀を踰へて以って今に迄れり

情眷眷而懷歸兮　情は眷眷として歸らんことを懷ふ
孰憂思之可任　孰か憂思の任ふべき
憑軒檻以遙望兮　軒檻に憑りて以って遙に望み
向北風而開襟　北風に向ひて襟を開く
平原遠而極目兮　平原は遠くして目を極むれば
蔽荆山之高岑　荆山の高岑に蔽れたり
路逶迤而脩迥兮　路は逶迤として脩く迥く
川既漾而濟深　川は既に漾として濟るに深し
悲舊鄉之壅隔兮　舊鄉の壅隔せることを悲しみ
涕橫墜而弗禁　涕は橫れ墜ちて禁へず
昔尼父之在陳兮　昔尼父の陳に在りしとき
有歸歟之歎音　「歸らん歟」の歎音有り
鍾儀幽而楚奏兮　鍾儀幽れても楚を奏し
莊舄顯而越吟　莊舄は顯れても越を吟ず
人情同於懷土兮　人の情は土を懷ふに同じ
豈窮達而異心　豈に窮達にして心を異にせんや

王粲の志とその詩賦について（甲斐）

長安の紛濁を逃れて荆州に來てより、自分が住むべき土地ではないにも係わらず、漫然と日を送り、遂に一紀十二年を過してしまったと王粲は反省し、望鄕の思いを切切と詠うのである。身を欄干に乘り出して遠望し、中原の彼方から吹いてくる北風に身をゆだねようとする王粲であったが、中原へ向けた視界の果てに待ち受けていたのは、中原を覆い隱すが如く立ちはだかる荆州の連山であった。悲歎に沈む王粲は、孔子が異鄕にあって「歸らん歟」と嘆息をついた故事、また、他國に囚われの身となっても故國の楚の事を忘れなかった鍾儀や、異國で勳功を得てもなお故鄕に思いを寄せていた莊舄の話を思い出し、人ならば聖人といえども必ず起る望鄕の念を我身に確認するのである。第三段においては、王粲の胸中に結ぼれる憂の實體、卽ち何故にこの荆州の土地が異鄕に思えて仕方ないのかが明らかにされる。

惟日月之逾邁兮　日月の逾え邁くことを惟ひ
俟河清其未極　河の清むを俟つに其れ未だ極まらず
冀王道之一平兮　王道の一に平らかなるを冀ひ
假高衢而騁力　高衢を假りて力を騁せんとす
懼匏瓜之徒懸兮　匏瓜の徒に懸るを懼れ
畏井渫之莫食　井渫の食ふ莫きを畏る
步棲遲以徒倚兮　步は棲遲として以って徒倚し
白日忽其將匿　白日は忽として其れ將に匿れんとす

風蕭瑟而並興兮　風は蕭瑟として並び興り
天慘慘而無色　天は慘慘として色無し
獸狂顧以求羣兮　獸は狂顧して以って羣を求め
鳥相鳴而舉翼　鳥は相鳴きて翼を舉ぐ
原野闃其無人兮　原野は闃として其れ人無く
征夫行而未息　征夫は行きて未だ息まず
心悽愴以感發兮　心は悽愴として以って感發し
意忉怛而憯惻　意は忉怛として憯惻す
循階除而下降兮　階除に循ひて下に降れば
氣交憤於胸臆　氣は胸臆に交り憤る
夜參半而不寐兮　夜參半ばにしても寐ねず
悵盤桓以反側　悵として盤桓として以って反側す

荆州の地で劉表に期待しつつじっと志の實現を待つ王粲は、その期待があたかも黄土に濁った黄河が澄みわたるのを待つように無駄なものかも知れないと思い、焦燥感を抱くのであった。その焦燥感が彼に自己の本心を吐露せしめる。卽ち、明王による秩序の回復を願望し、その回復のために明王の下で自分の力を思い切り振いたい、ふくべが役立てられぬまま空しく掛けられているようには、また、飲まれるべき澄んだ井戸の水が無駄に放っておかれ

るようにはなりたくないと詠うのである。秩序の回復のために力を盡したいと願う王粲にとって、實力を發揮させてくれぬ劉表の下に留まり續ける事は、もはや耐えられない事となっていたのであった。しかしながら、その王粲の叫びに反應する現實はなく、王粲は結局、憂を消すどころか更に增幅してしまい、夕暮の冷たい秋風に一人耐えかねて樓を降り、遂には知音の明主を求めて眠れぬ夜を過さねばならないのである。

王粲がこの賦を作った時、これによって自分の志を示し、劉表に重用されるのを希望したことは想像に難くない、王粲は、文才による劉表のための代筆程度の仕事では不滿だったようである。けれども、この志の主張もやはり遂には徒勞に終ったらしい。なぜなら、その後、劉表の後嗣劉琮と共に曹操に降った折、王粲は曹操に對して劉表を次のように批判するからである。

劉表は荆楚に雍容たり、坐して時變を觀、自ら以爲へらく西伯を規とすべしと。士の亂を荆州に避くる者は皆海內の儁傑也。表は任ずる所を知らず、故に國危きに輔くる無し。（魏書王粲傳）

王粲がかつて世話を受けた劉表に對する批判は嚴しい。劉表は彼の下に集まり來たった天下の俊傑たちの用い方を知らなかったから、國を滅ぼすハメになるのだというのである。この批判に、王粲自身が天下の俊傑であるという意識と、それにも係わらず劉表に重用されぬまま終ったという彼の強い不滿を讀み取ることができるのである。

これを要するに、王粲の荆州での青年期は、劉表に對する期待から失望へと向うものであった。この時期に作られたと思われる「七哀詩」其一は、王粲が士大夫としての責任感にさいなまれて、また、「登樓賦」は志の坐折の代償として作られたものであると考えてよい。

三

劉表には厚遇されず、憂いに日を送っていた王粲であったが、曹操に降るや、丞相掾の地位を得、關内侯の爵を得ている。劉琮を曹操に降服させるのに盡力したからである。丞相掾とは後漢王朝に丞相の位を得た曹操の補佐官、關内侯とは二十の爵位のうち、上から二番目のものである。王粲はこれによって後漢王朝の政治制度の下に完全に組み込まれ、士大夫として經國濟民に志を果す一應の場所を與えられたことになった。都を離れてよりこれまで記錄に殘る程の地位を得られなかった王粲が歡喜したのは當然である。王粲が曹操に降って間もなく劉表を批判し曹操を激賞したのは、[15] 俊馬を自負する王粲にとって曹操が伯樂に見えたからに違いない。後、彼は軍謀祭酒に遷る。建安十八年に魏國が建てられるや更に侍中に昇るのだが、この軍謀祭酒に遷ったころから、曹丕・曹植や、徐幹・陳琳・阮瑀等の文人たちと本格的な交游が始まる。[16] 王粲の曹父子の下における詩賦は、大概彼らとの交游によって作られたと考えてよい。曹父子の下に集まった文章家の中でも、王粲の場合は、凌迅氏が指摘したように、曹丕や曹植の命を受けて作った詩賦が他の文人に比べて確かに多いようである。鈴木修次氏の集められた資料によれば、「寡婦賦」「馬瑙賦」「槐賦」は曹丕の命により、「七釋」は曹植の命を受けて作っている。[17] 更に、逾紹初氏の指摘と推察によれば、「神女賦」が曹操のために、「浮淮賦」「羽獵賦」が曹丕の命により、「詠史詩」が曹植の命で作られている。[18] このような例から推測するならば、斷片として殘る小品を題材にした賦や、雜詩及び「從軍詩」などの詩もまた、その多くが曹父子の意向の下に作られたものと思われる。そうなると、王粲はほとんど曹父子のお

かかえ詩人になり果てた感すらある。試みに、曹操に降って後の代表的な詩、「從軍詩」其一を見てみたい。

從軍有苦樂　軍に從ふに苦樂有り
但問所從誰　但だ問ふ從へる所は誰ぞと
所從神且武　從へる所神にして且つ武なり
焉得久勞師　焉ぞ久しく師を勞するを得ん
相公征關右　相公、關右を征するに
赫怒震天威　赫怒して天威を震はす
一舉滅獯虜　一舉して獯虜を滅し
再舉服羌夷　再舉して羌夷を服す
西收邊地賊　西のかた邊地の賊を收ふること
忽若俯拾遺　忽として俯して遺を拾ふが若し
陳賞越丘山　賞を陳くこと丘山に越へ
酒肉踰川坻　酒肉、川坻に踰えたり
軍中多飫饒　軍中、飫饒多く
人馬皆溢肥　人馬、皆溢肥せり
徒行兼乘還　徒ち行くものは乘を兼ねて還り

空出有餘資　空しく出づるものは餘る資あり
拓地三千里　地を拓くこと三千里
往返速若飛　往返するに速きこと飛ぶが若し
歌舞入鄴城　歌舞し鄴城に入り
所願獲無違　願ふ所獲て違ふ無し
盡日處大朝　日を盡して大朝に處し
日暮薄言歸　日暮れて薄(ここ)に言(われ)歸る
外參時明政　外は時の明政に參じ
內不廢家私　內は家私を廢(す)てず
禽獸憚爲犧　禽獸、犧たらんことを憚れ
良苗實已揮　良苗、實に已(ひか)に揮る
竊慕負鼎翁　竊に負鼎の翁を慕ひ
願厲朽鈍姿　朽鈍の姿を厲さんことを願ふ
不能效沮溺　沮溺に效ひて相隨ひて
相隨把鋤犂　鋤犂を把(と)る能はず
熟覽夫子詩　夫子の詩を熟覽するに

信知所言非　信に言ふ所非なるを知りぬ

この詩は、建安二十一年王粲四十歳の時の作。軍人たちに向って、「戰での苦樂は指導者によるものだ、あなたがたの指導者は誰ですか」と問いかけることから始まるこの詩は、次に、丞相の地位に立つ曹操の將軍としての實力を讃える。曹丞相は、輕輕と北方の異民族を平らげ、西方の逆賊を治め、かつ從った軍人には山川のような褒賞と酒肉が與えられた、たとえ空手で從軍しても餘りある財を得て歸ることができたのだと詠うのである。その後、曹操の朝廷への誠實な勤務ぶりと、臣下への思いやり、及びそれによる國土の繁榮を述べて、最後に王粲自身の所感が詠われて締め括られる。その所感とは、昔殷の湯王に鼎を負って仕え夏の桀王を伐たしめた賢相である伊尹の如く、我身を曹操のために働かせたい、隱者の沮溺のように世に隱れ農耕に生きることなどできはしないし、隱居を求めた孔子の詩も正しいとは思えない、というものであった。

この「從軍詩」其一は、「七哀詩」其一に既に見られた王粲の志と同樣の志、卽ち秩序の回復のため、士大夫としての責任を果したいという願望に基づいて作られたものと考える事が一應はできる。[19] つまり、曹操という力量ある指導者の下にあって治世に十分に腕を振いたいというわけである。しかし、この詩が、曹操軍の宣傳歌を兼ねていることにも氣づく必要がある。なぜならば、戰う者にとって最も恐ろしいはずの戰鬪場面を詠い込むことがなく、ただ曹操の將軍としてのすばらしさと、曹操の下に軍人となった者の有益さを誇張して說くばかりだからである。因に曹操は、この「從軍詩」其一が詠われる以前に、人材を求めるなりふりかまわぬ通達を二度も發している。また、當時は各地で大規模な戰鬪が相次ぎ、この詩が作られた年の冬には、吳征伐の軍を動かしている。たび重なる

戰略には可能な限り大量の軍人が必要なはずであり、曹操を指導者と仰ぐ王粲が文才を振ってこのような宣傳の詩を作り、曹操に協力した事は十分考えられる事なのである。もちろんこの詩の内容は確かに王粲の志に沿うものだとしても、それが曹操軍の宣傳歌を兼ねているとすれば、この詩は王粲自身のための切實な思いばかりが詠われたものとは言い難い。加えて「七哀詩」其一が、母親が愛子を捨てる場に臨んだ個人の具體的な哀しみと憤りを描き得ていたのに對して、この「從軍詩」其一をはじめ、他の「從軍詩」でも從軍の寂しさとそれを克服する決意を詠うばかりで戰鬪に必然の血腥ささと激情に些かも觸れないのは、王粲が實際の戰鬪の場からかなり隔てられてこれらの詩を作っていた事をも暗示する。だとすれば「從軍詩」が詩的感動を欠くとされるのも故なしとは言えないのではあるまいか。[20]

以上、「從軍詩」其一を通して見た通り、曹操下における王粲は、やはりおかかえ詩人的な立場にあって、曹父子のために詩賦を作っていた可能性が強い。宦官を祖父に持つ濁流の曹操が、將來を期待する息子曹丕・曹植らに士大夫の教養と品格を身につけさせるため、清流士大夫の王粲を彼らのお守役としたのだとすると、[21]曹丕・曹植を相手に、また時には曹操のために詩賦を作るおかかえ詩人に王粲がなってしまっていたとしても無理はないのである。

しかしながら、王粲は文才を振うことばかりを仕事にしていたわけではない。曹植の「王仲宣誄」によれば、曹操に降って關內侯の爵を得た王粲は、「世を憂ひて家を忘る」程に仕事に努めたといわれるし、軍謀祭酒に遷ってからは、建議は皆認められ、その計畫には無理なものが一つもなかったという。[22]更に、曹操が建安十八年に九錫を加えられ、魏國を建ててより、王粲は宰相にも匹敵する侍中に昇り、國家運營のための制度作りに主體となって取

り組んでいるのである。『魏書』王粲傳には、この間の事情を、

魏國既に建つや、侍中に拜せらる。博物多識にして、問ふに對へざるなし。時に舊儀は廢弛す、制度を興し造るに、粲は恆に之を典る。

と記す。裴松之はここに注をつけ、晉の摯虞の『決疑要注』を引く。

摯虞『決疑要注』に曰く、漢末喪亂し、絶えて玉珮なし。魏侍中王粲は舊珮を識り、始めて復た之を作る。今の玉珮は、法を粲に受く也。

また、『魏書』杜襲傳には、

（杜襲）、魏國既に建つや、侍中に爲る、王粲・和洽と並び用ひらる。粲は彊識博聞、故に太祖游觀出入するに、多く驂乘するを得たれども、其の敬せらるることに至れば洽・襲に及ばず。

とあり、王粲にとっては些か皮肉な結果となっているけれども、それでも國主の側でその博學強記の實力を振う機會は十分に與えられていたといってよい。

以上の記述から推測すると、王粲が殘すいくつかの政治に關する論文は、大概この侍中の時期に作られたものと考えられる。例えば、『魏書』武帝紀、建安二十年十月の記事に、新に官爵の設置を述べて、

冬十月、始めて名號侯より五大夫に至るを置く。舊の列侯・關內侯と凡そ六等、以って軍功を賞す。

とあるのは、王粲の爵制の再建を願った「爵論」を受けてのことだと思われる。なぜならば、建安二十年に設けられた爵は名號だけで領土はない。[23] これは、「爵論」に民爵についてではあるけれども、

貨財を以って賞と爲すは、供す可からず。復除を以って賞と爲すは、租税損減す。爵を以って賞と爲すは、民は勸みて而も費は省せらる。故に古人爵を重ずる也。

とある王粲の「爵」に對する考え方に沿うものである。「爵論」は全文は殘らないようであるから、斷定はできないけれども、このような王粲の考え方がなければ、わざわざ名號だけの爵位を新設するはずがないのではないか。

曹操の下で王粲が關わった二つの事柄、つまり曹丕・曹植の守役を兼ねての詩賦の制作と、與えられた役職を果し一國の制度を作り上げる事とを比べるならば、經國濟民を志とした王粲が後者を何よりも重視した事は間違いない。若年のころ、蔡邕について學んだ王粲である。軍を率いて秩序を回復する事より、制度を創り整える事で國に秩序を再建する事の方が彼の志に沿う方法であったと思われる。王粲が魏國の制度の整頓のため全力を傾けた事は想像に難くない。

これを要するに、曹操に降ってよりの王粲は、自分の志をそれなりに實現できる地位を與えられ、その仕事に勵むことに盡力していたと考えられる。だとすれば、この時期に作られた詩賦は、彼の餘力で作られたといってよい。荆州期の作「七哀詩」其一が、王粲の、士大夫として無力である事への責任感から、また、「登樓賦」が、果せぬ志の代償として作られた事を思い出せば、曹操に降って以後の詩賦に傍から見て迫力が欠けるのは致し方ないように思われる。王粲にしてみれば、士大夫の責任を果したいという點では終始一貫した態度を持ち續けているのだし、なによりも彼は詩人を目指していたのではないからである。

おわりに

以上の考察にさほどの間違いがないとすれば、王粲が曹操に降ってより見せた詩賦の變化は、單に王粲の生活が餘裕あるものになったからばかりではない事は明らかであろう。

ところで、この考察の結果によると、建安文壇屈指の詩賦家である王粲は、詩賦の制作は二の次であり、經國濟民の仕事に携わる事を第一の仕事と考えていた事になる。王粲が殘した作品を讀む限り、現實の秩序の回復は必ずや可能であると信じていた氣配があるのだから、王粲が經世に力を注ぎ込んだのも當然であったと思われる。建安文壇のパトロンであった曹丕や曹植の詩賦觀も、王粲と同樣に、政治に先んずるものとしては詩賦を認めていない。[24] 思うに、個人の胸中で經世に代るものとして、詩賦の制作自體が位置を占め始めるのは、魏末に登場する阮籍の「詠懷詩」の頃からではないだろうか。經世の可能性を信じられなかった阮籍にとってすれば、蓋し當然である。

（一九八六・九・二十二）

注

（1）『王粲集』（俞紹初校點、中華書局出版、一九八〇・五）附錄二、王粲年譜參照。

（2）『建安文學研究文集』（黃山書社、一九八四・十一）所收、凌迅「王粲傳」

（3）『後漢書』黨錮列傳參照。

（4）『三國志』魏書　王粲傳參照。

（5）丹羽兌子「蔡邕傳おぼえ書き」（名古屋大學文學部研究論集、史學十九。一九六〇）及び、岡村繁「蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢」（日本中國學會報、第二十八集、一九七六）には、清流の王粲を衆人の前で稱贊する事によって、蔡邕自身が清流を尊重する態度を衆人に示

そうとしたという考察がある。

(6)『後漢書』劉表傳では「八顧」の一人に擧げられたと記し、黨錮傳では「八及」の第三に名を連ねる。今は黨錮傳による。

(7)「七哀詩」其一の成立年はよく分らないが、王粲が荆州に向うその時に作られたと考えるよりも、鈴木氏同樣(注(17)參照)に、荆州に着いて後當時を思い出して作ったとする說の方が、妥當性が高いと思われる。しかし、そうではあっても、ここに描かれる情景と心情は、長安出離の折のものと考えてかまわないと思う。

(8)「悟彼下泉人、喟然傷心肝」の二句は、「悟りぬ、彼の下泉の人の、喟然として心肝を傷ましむるを」と讀む例が多いようであるが、この場合、「悟る」は一句に係るものであり、後句は王粲の心情を直接述べたものと考える。同樣の用例は、やや時代は下るが、魏阮籍の「詠懷詩」其十九(十五)に「千秋萬歲後、榮名安所之。乃悟羨門子、皦皦今自嗤」とある。二句を一連として讀むのは、「下泉」の詩の本文に依るものと思われるが、李善はこの二句の注には「下泉」の序を引くばかりであって、その後句と「下泉」詩本文との關係を指していない。李善は、その後句は王粲の心情を述べたものと解釋したのだと思われる。

(9)『詩經』曹風、「下泉」序に、「下泉思治也。曹人疾共公侵刻下民、不得其所、憂而思明王賢伯也。」とある。

(10)「三輔論」「荆州文學記官志」の成立年代は注(1)の年譜による。

(11)魏書、王粲傳參照。

(12)注(1)の年譜によると、この賦は、曹操に降って後、麥城で作られたとされる。筆者は制作地の考證には贊成するけれども、賦の内容からすると、王粲が荆州について十二・三年後、劉表の下で作られたと考えた方が妥當性が高いと思われる。

(13)「假日」は、李注文選「暇日」に作る。今『楚辭』「離騷」「奏九歌而舞韶兮、聊暇日以娛樂」の文下の洪興祖補注に「顏師古云、此言遭遇幽厄、中心愁悶、假延日月、苟爲娛樂耳、今俗言借日度時、故王仲宣登樓賦云、登茲樓以四望兮聊假日以消憂、今之讀者、改假爲暇、失其意矣。李善注仲宣賦引荀子多暇日、亦承誤也」とあるに從う。尚、顏師古の言は『匡謬正俗』「假」の條。

(14)王粲の原籍は山陽高平(現在は山東省)であるが、曾祖父・祖父・父と京都に就職しているので、王粲も都育ちであったろう。よってここで起る歸鄉の念とは、京都の

ある中原を指すものと思われる。

(15)『魏書』王粲傳に、「太祖（曹操）辟（王粲）爲丞相掾、賜爵關内侯。太祖置酒漢濱、粲奉觴賀曰……明公定冀州之日、下車卽繕其甲卒、收其豪傑而用之、以横行天下、及平江漢、引其賢儁而置之列位、使海内回心、望風而願治、文武並用、英雄畢力、此三王之擧也」とある。尙、本文で先に揭げた劉表批判の文は、これと同時に述べられたものである。

(19) 注（1）王粲年譜參照。

(17) 鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七）第三章　第二項參照。

(18) 注（1）王粲年譜參照。

(19) 下定雅弘「王粲詩について」（中國文學報・第二十九册、一九七八）二章には、この立場に立つ意見が述べられている。

(20) 伊藤正文「王粲詩論考」（中國文學報・第二十册、一九六五）五章に、「王粲の「從軍詩」は表現・構成ともにすぐれ、從軍を主題とする作品の見事な典型となっているが、詩的感動をさそわれることは不思議に少ない。」とある。但し、その理由については、伊藤氏の說をそのまま認めるわけではない。

(21) 岡村繁「建安文壇への視角」（中國中世文學研究五、一九六六）一章參照。

(22) 曹植「王仲宣誄」に「我公寔嘉、表揚京國。金龜紫綬、以彰勳則。勳則伊何、勞謙靡已。憂世忘家、殊略卓峙。乃署祭酒、與君行止。算無遺策、晝無失理。」とある。尙、この誄には、王粲が詩賦の制作に力を入れた事にはまったく觸れていない。以って曹植の詩賦觀も窺い得る。

(23) 魏書武帝紀、該當部の裴氏注參照。

(24) 岡村繁「曹丕の典論論文について」（支那學研究、第二四・二五。一九六〇）四章參照。

附記

テキストは、「王粲集」（俞紹初校點、中華書局　一九八〇）を用いたが、文選掲載作品については、胡克家の「文選考異」を參照した。王粲の生涯については、伊藤正文氏の「王粲傳論」が詳しいと聞いたが、入手できず未見である。